

2024年度活動概要

最新言語理論に基づく応用英語文法研究会

最新言語理論に基づく応用英語文法研究会は、言語研究・言語理論の英語教育へ応用をテーマに、中部応用言語学研究会（対面式開催）及び機能主義言語学研究会（Zoom 開催）との合同研究例会を中心に活動した。大学レベルの英語教育で扱う言語現象に関して、本研究会会員の今井隆夫は認知言語学の視点から、長峯貴幸（英国留学中）は音韻獲得における認知システムと ELF 音声学の視点から、北尾泰幸は生成文法理論の視点から、都築雅子と高橋直子は語彙意味論（移動構文・結果構文研究）とコーパス言語学の視点から、新入会の内田政一は語彙意味論（移動様態動詞研究）の視点から、そして大森裕實は歴史言語学と機能主義言語学の視点から新たな切り口を攻究する試みを継続した。

特に、令和 6 年度（2024 年度）は「中部応用言語学研究会」と研究例会を共同開催し、Radden, G. & Dirven R., *Cognitive English Grammar*(2007)をテキストにして、認知文法に対する理解を深め、従来の学校文法（学習文法）の説明を改訂する糸口を追窮した。

また、新入会員（内田政一）による移動様態動詞に関する研究発表を複数回行ない、Iwata, S. “Does MANNER count or not?: Manner-of-motion verbs revisited” (2002) の Review & Criticism を中心に、移動様態動詞の学習文法への導入を考察した。

さらに、JACET 第 63 回国際大会《SIG Workshop》(2024.8.29)において「新しい視点からの応用英語文法（教育文法）《Applied English Grammar/ Pedagogical Grammar in New Perspectives》」というトピックで研究報告を行なう予定であったが、悪天候による当該大会中止により、実施することができなかった。本来予定していたものは、1.「多用される 2 つの英語構文に対する眞の理解－英語文体論と伝統的科学文法の融合－」（大森裕實）；2.「英語が言語化することと日本語が言語化することの違い－認知言語学（グラウンディング理論）からの提案－」（今井隆夫）；3.「具象と抽象を往来する英語の動詞に関する考察－語彙意味論からの示唆－」（内田政一）の三本立ての内容であった。

本研究会は、第 53 回国際大会（2014）から第 58 回国際大会（2019）まで連続してシンポジウムを実施し、第 60 回国際大会（2021）、第 61 回国際大会（2022）、第 62 回国際大会（2023）では研究会の活動内容を ZOOM 報告及びポスター発表することにより、多くの方々と意見交換する機会を設けて、活動の環を広げてきました。第 63 回国際大会（2024）は悪天候のため中止となり、予定していた SIG Workshop が実施できずに残念な結果となりましたが、次年度を期して研究報告を行ない、今後も継続して研究テーマを攻究していきたいと考えています。